

当院における *Actinotignum schaalii* の分離状況と患者背景

◎阿南 晃子¹⁾、荒嶋 知世子¹⁾、小武 春花¹⁾、加賀山 朋枝¹⁾、江原 佳史²⁾
昭和大学 横浜市北部病院 臨床病理検査室¹⁾、昭和大学 横浜市北部病院 感染管理室²⁾

【はじめに】 *Actinotignum schaalii* (以下 *A. schaalii*) は普通培地に発育困難な通性嫌気性のコリネフォームを呈するグラム陽性桿菌であり、主に高齢者の尿路感染の起原因菌として検出される。本菌の分離には嫌気培養もしくは5%炭酸ガス培養が必要であるが、尿培養においてこれらの検査を併用する施設は少ない。当院では尿検体の1割程度で嫌気培養が実施されており、本菌の検出がしばしば認められる。

今回、当院で2020年1月以降に分離された *A. schaalii* について患者背景を含め報告する。

【対象】2020年1月から2021年10月までに *A. schaalii* が分離された13検体12症例。

【結果】 *A. schaalii* の検出部位は尿検体由来11株(84.6%)、血液検体由来2株(15.4%)であった。血液検体由来の1例は尿と血液より同時検出されたが、1例は尿検体において嫌気培養が実施されておらず、複数菌の発育を認めたものの本菌は検出されていなかった。尿検体由来11株のうち8株は嫌気培養依頼があり、複数菌が検出されていた。3株

は嫌気培養依頼がなく本菌のみ分離されていた。検出患者の男女比は2.5:7.5で女性から多く分離されていた。年齢はすべて70歳以上であり、70歳代41.7%、80歳代33.3%、90歳以上25.0%、平均82.4歳であった。診断名は尿路感染症が7例(58.3%、内5例が結石保有)、次いで肺炎が3例(25.0%)であった。

【まとめ】 *A. schaalii* は高齢者の尿路感染の起原因菌とされており、当院においても80歳代以上の尿路感染症患者より多く検出されていた。また、多くの症例において複数菌が関与していたが、嫌気培養併用のため、検出が可能であった。また嫌気培養依頼なしに検出された症例は、すべて本菌のみ発育していた。このため、尿検体に嫌気培養を追加することにより、本菌の検出感度が高くなると考えられた。しかし、すべての尿検体に嫌気培養を追加することはコスト的にも容易でないため、特に高齢者の尿路感染症を疑う場合は本菌の関与を疑い、塗抹検査を加味したうえで嫌気培養もしくは炭酸ガス培養を実施することも必要であると考ええる。